【研究論文】

高大連携による教育評価研究プロセスに関する検討

――高校生サミットの取り組みに着目して――

鎌田　祥輝

はじめに

本稿では、京都大学大学院教育学研究科教育方法学研究室（以下、教育方法学研究室と記す）の大学院生と兵庫県立尼崎小田高等学校（以下、尼崎小田高校と記す）との、教育評価についての共同研究の軌跡を取り上げる。具体的には、尼崎小田高校が主催するプログラム「環境・防災地域実践活動高校生サミット」（以下、高校生サミット）における共同研究に着目する。高校生サミットは、海をフィールドとして探究活動を行っている高校生の情報交換の場として、2011 年度から毎年実施されていた「瀬戸内海の環境を考える高校生フォーラム」（以下、高校生フォーラム）が発展したものである。本稿では、筆者が大学院生代表であった 2018 年度､2019 年度の高校生サミットを中心に検討する。2019 年度の高校生サミットには、瀬戸内海周辺地域の高校を中心に 35 校の生徒が参加し､ポスター発表やディスカッション､「人間と自然の共存を考える」をテーマとした共同調査やワークショップが行われた[1]。

高校生フォーラム､高校生サミットは 11 月に行われるポスター発表等が実施される会の名称であるが、7 月から 12 月にかけて継続的に行われる共同調査やワークショップを含む長期的な企画の名称でもある。本稿では 11 月に行われる行事を「高校生フォーラム」、「高校生サミット」と表記し、それらを含む長期的な企画を高校生フォーラム､高校生サミットと表記する。

2014 年度から、高校生フォーラムにおける教育評価を対象とした共同研究が継続的に行われてきた。当時大学院生の代表であった本宮裕示郎や若松大輔が高校生フォーラムや共同研究の成果の意義や課題の検討を行っている。本宮は、2014 年度の高校生フォーラムの企画・運営を行う生徒実行委員会で行われたディスカッションの分析[2]､および社会的スキルの評価に用いられたルーブリックの検討を通して生徒実行委員会の意義と課題を明確にした[3]。若松は、2016 年度の高校生フォーラムについて、改訂されたルーブリックの新規性と活用のあり方の報告を通じて、ルーブリックを指導・評価に活用する可能性を検討している[4]。

これらは、社会的スキルを育成し評価することを目標としている点、ルーブリックに着目して検討している点で共通している。しかし、2018 年度からは、高校生フォーラムが高校生サミットに改称し、目標や評価の対象、評価方法が大きく変化した。その結果として開発された評価方法は別稿で報告している[5]。しかし、6 年間にわたる共同研究を通した評価方法の変化、そして教育方法学研究室と尼崎小田高校との共同研究それ自体の変化とその意義が対象化されていない。

本稿では､評価方法と共同研究の変化を関連付けて、共同研究の成果とその意義を明らかにする。そのために、尼崎小田高校と教育方法学研究室との共同研究で行われたやり取りや実際に活用された評価方法の意図を概観し､評価方法と共同研究の変遷を明らかにする。まず､2018 年度までの共同研究の経緯と研究成果を概観し、共同研究の成果と課題を整理する。次に、2019 年度の高校生サミットで筆者らが提案したポートフォリオ評価法を中心に､共同研究のプロセスを詳述する。

なお、本稿は共同研究のプロセスを教育方法学研究室の立場から記述することを目的としている。そのため、高校生サミットや尼崎小田高校の取り組みのすべてを描いているわけではない。

１．高校生サミットに至る経緯と研究課題

(１)　高校生フォーラムにおける共同研究

教育方法学研究室との共同研究が始まった 2014 年度の高校生フォーラムでは、11 月に行われる「高校生

フォーラム」の企画・運営を行う生徒実行委員会に参加する生徒のコミュニケーション力・マネジメント力（社会的スキル）の向上が目指された。そのために、生徒実行委員会でディスカッションを実施するとともに、ディスカッションを通して向上した社会的スキルを評価するためのルーブリックが作成された。コミュニケーション力は、「自主的に他者と関係をもとうとする力」、マネジメント力は「自主的に企画を計画し実行しようとする力」とされた[6]。ルーブリックは、尼崎小田高校の教員が作成したものをもとに、教育方法学研究室と話し合いを通して改訂された。

ルーブリックは、生徒実行委員会で行われるディスカッションの場面において、教師が生徒の成長を評価するために用いられた。ディスカッションは、高校生フォーラムの企画・運営を行う班と共通課題研究を計画・実施する班とに分かれて行われた。用いられたルーブリックについて今後乗り越えるべき課題として、①ディスカッションの成否が個人によるのか集団によるのか判別が難しい、②与えられたテーマがディスカッションの成否に影響を与えている、③ディスカッションを行うメンバーを固定にするか変更するかによって、それぞれ生じる問題点がある、④「理解」、「貢献」といった記述語が曖昧であることの 4 点が挙げられた[7]。さらに本宮は、探究活動の成果を下敷きに共通課題研究についてのディスカッションを行った班の観察から、認知的スキルが社会的スキルの向上に与える影響を認めた。以上から本宮は、認知的スキルと社会的スキルの関連、そして社会的スキル内の関連を明らかにする必要性を指摘した[8]。

2016 年度の高校生フォーラムに至るまでに、予備的ルーブリックの作成とそれを用いた評価が行われ、生徒の実情に合わせて尼崎小田高校において記述語の改訂が行われた。このようにして作成された 2016 年度のルーブリックは、①コミュニケーション力やマネジメント力の記述語が、改善を重ねるごとにより教師の実感に即したものになった、②ルーブリックに評価者の見取りの記述欄を設けたことで、教師にとっても評価者としての力量を高める訓練の機会となった、という特徴を有することを若松が指摘している[9]。他方で、①コミュニケーション力が個人の所有物なのか、状況の中で生成される現象なのか、②コミュニケーション力やマネジメント力について、どこまでが性格でどこからが教え伸ばしうる学力なのか、その線引きが曖昧である、という課題も指摘されている。加えて若松は、高校生フォーラムのなかで教師や生徒がルーブリックをどのように活用していたのかを検討している。

連携校の教員からは、ルーブリックがあることで生徒の成長を見る視点を得ることができることや、生徒にルーブリックを事前に示すことで、生徒にとっても頑張り方を知るヒントになる、といった声がきかれた。これらに加えて生徒が記述した感想も勘案して若松は、生徒にルーブリックを事前に示すことで、生徒にとって目標が明確になり自己調整につなげることができるという予想を示すとともに、指導へ活かすという側面の弱さが今後の課題であることを指摘した[10]。

以上の本宮と若松の報告から、以下の 3 点を指摘することができる。①高校生フォーラムでは、社会的スキルの向上を評価することを目的としてルーブリックが作成された。②社会的スキルと認知的スキルとの関連への示唆、生徒の自己評価の可能性、などの新たな知見や可能性が導かれた。③継続的な改訂にかかわらず、記述語の精査やディスカッションの成否を評価すること自体の課題など、類似の課題が残されている。

(2) 2018 年度の高校生サミットにおける共同研究

2018 年度からは、高校生フォーラムが高校生サミットに改称され、環境だけでなく防災の観点も加えて、高校生が探究活動の成果を活かして地域の人々と連携しながら、地域の問題に対して「行動」「提言」「貢献」できることが目標とされた[11]。新たな目標やこれまでの課題を踏まえて評価方法の開発が行われた。

まず、尼崎小田高校から 1 年間の活動計画と評価研究の概要について説明を受けた。評価研究に関しては、各学校の探究活動と高校生サミットでの学びの記録をともに記述し、高校生サミット前後での変容を生徒と教師が確認できるようにしたいと提案を受けた。2018 年度の高校生サミットの取り組みを表 1 に示している。高校生フォーラムとの違いとして大きく以下の 3 点が挙げられる。①生徒実行委員会の共通課題研究は行わない、②ルーブリックを用いた評価とあわせて一枚ポートフォリオ評価（OPPA）を行う、③以前のコミュニケーション力、マネジメント力の評価だけでなく、高

表 1.　2018 年度、2019 年度の高校生サミットの内容

開催月	内容	2018 年度の活動	2019 年度の活動
7 月	地域探究スキルワークショップ 1 第 1 回生徒実行委員会	須磨沿岸で実習 : 海岸測量、砂サンプルの採集、考察 ディスカッション :「自分たちの地域にはどのような課題があるのか」	須磨沿岸で実習 : 海岸測量、砂サンプルの採集、GIS を用いた調査、考察 当日の振り返り、共同調査の内容についての検討
9 月	地域探究スキルワークショップ 2 第 2 回生徒実行委員会	船上実習、講演 参加校の取り組み紹介	船上実習、講演 共同調査の結果の共有
10 月	地域探究スキルワークショップ 3 第 3 回生徒実行委員会	「人と防災未来センター」施設見学、GIS を用いたデータ収集 高校生サミットの役割分担	「人と防災未来センター」施設見学、講演 共同調査の中間報告とディスカッション
11 月	環境・防災地域実践活動高校生サミット	ポスターセッション、ディスカッション :「課題研究の内容をどのように地域実践につなげるか、どう地域に知ってもらうか」	共同調査報告、ポスターセッション、ディスカッション :「人と自然の共存を考える」、「豊かな瀬戸内海」をテーマとしたに 3 つの議題を設定
12 月	京都大学発表会 第 4 回生徒実行委員会	ポスターセッション、大学見学 生徒実行委員会振り返り	ポスターセッション、大学見学 生徒実行委員会振り返り

校生の課題研究に対する認識の深まりに高校生サミットがいかに寄与しているかを分析する。

OPPA とは、「教師のねらいとする授業の成果を、学習者が一枚の用紙（OPP シート）の中に学習前・中・後の履歴として記録し、その全体を学習者自身が自己評価する方法」[12]である。OPP シートの構成要素として、「学習前・後の基本的な問い」、「学習履歴」、「学習全体を通した自己評価」がある。

2018 年度初めに尼崎小田高校で OPP シートや認識の深まりを見取るルーブリックが作成された。それをもとに高校生サミットが始まる前に教育方法学研究室で検討を行い、下記の提案をした。①「学習前・後の基本的な問い」として「高校生が地域の課題解決に貢献するために必要なことは何か」が設定されていたが、学習前から地域課題に貢献すべきという価値観が前提となっている。「探究とは何か」といったオープンエンドの問いを設定し、最終的に「地域課題のために探究する」といった文が出てくることを目標としたらどうか。②たたき台の OPP シートには「学習全体を通した自己評価」欄がないが、前後の変容を確認するためにその欄を含める必要性がある。③新たに作られた認識の深まりを見取るルーブリックでは、アウトプットとインプットの観点に分けているが、インプットの評価の記述語や認識と言うよりも態度の評価になっている。

これを踏まえて尼崎小田高校において OPP シートが作成された[13]。OPP シートの「学習前・後の基本的な問い」は「探究（課題研究）という用語を用いて、3 つの文を書きなさい」であった。また「学習履歴」には、「本日のワークショップで最も印象に残ったこと」、「疑問に思ったこと、残った疑問点」、「あなたの課題研究にどう活かせるか」の 3 つの記入欄が設定された。

他方、認識の深まりを見取るルーブリックは用いられず、前年度にも活用されていた、社会的スキルについて生徒が 7 月と 12 月に自己評価をするためのルーブリックが用いられた[14]。ルーブリックを生徒が自己評価に活用する点では高校生フォーラムでの知見が活かされた。他方で探究について振り返る一枚ポートフォリオと社会的スキルについて自己評価するルーブリックが別個に用いられたことで、社会的スキルと認知的スキルの関連を検討するという視点は後退した。

高校生サミット開始後の共同研究は、大学院生が生徒実行委員会を見学し、得られた気づきと考察を尼崎小田高校の教師と共有する形で行われた。11 月の「高校生サミット」後、「高校生サミット」で行われたディスカッションの観察記録や OPP の記述をもとに、教育方法学研究室から 2019 年度の高校生サミットに向けた提案が行われた。評価方法に関する提起として特に重大なものが、「『事前に生徒の成長を予想してルーブリックを作成して評価する』という評価―指導改善のモデルが、本サミットの取り組みにはそぐわないので

はないか」という提起である。その根拠に、①生徒から見て高校生サミットは社会的スキル等の向上を目指す活動には見えず、目標が教員と生徒とで不整合であり、②月に1回の活動のみではスキル向上のための意図的な指導は難しいことが挙げられた。

この提起から、生徒の成長を目標にその達成を評価するのではなく、むしろサミット自体の価値を評価するために生徒の成長を捉える（評価する）ことが提案された。しかも事前に定めた目標の達成ではなく、生徒の多様な成長を捉えることである。この提案は、高校生フォーラムより続いていた、ルーブリックの改善と活用による評価研究という前提を崩すものであった。

２. 2019 年度の高校生サミットにおける共同研究

2019 年度の高校生サミットの取り組みを表1に示している。2018 年度との大きな違いとして、高校生フォーラムの生徒実行委員会で行われていた共通課題研究を共同調査として復活させたことが挙げられる。これを踏まえて教育方法学研究室で評価方法を検討した。教育方法学研究室からは、共同調査の成果を蓄積するポートフォリオを用いることを提案した。さらに、ポートフォリオに事前に挟み込む振り返りシートを、OPP シートの構成要素を参考にして作成・提案した。振り返りシートには、探究の深まりと社会的スキルについて自己評価する欄を設けた。これは、共同調査（探究活動）を生徒が各学校で行い、これについて自己評価を行うとともに、生徒実行委員会のディスカッションでは、高校生フォーラム以来評価していた社会的スキルを自己評価することが意図されていた。また、ポートフォリオを活用する意義を生徒自身が感じられるように、共同調査の達成点と今後の課題を記入する欄を設けて活動の見通しを立てるのに役立てたり、ポートフォリオに収集する資料や記述を例示した。

これに加えて、教師、生徒が用いるルーブリックも作成された。ルーブリックは探究の深まりと社会的スキルについて、高校生にもわかりやすく簡潔な記述語が用いられた全体的ルーブリックであった。さらに尼崎小田高校で活用されていた課題研究を評価するルーブリックやこれまでの社会的スキルを評価するルーブリックを参考に観点別ルーブリックも作成された。ただし、観点別ルーブリックはあくまでも自己評価の参考資料にすぎないことが明記された[15]。ルーブリックは、ポートフォリオを活用するなかで、生徒の自己評価に用いられるものとして改訂された。

7 月の生徒実行委員会実施までに振り返りシートの改善が行われた。特に大きな変更が加えられ、かつ評価のために最重要であった箇所が、1 年間の生徒の成長を見取るための「学習前・後の基本的な問い」である。教育方法学研究室で作成した初期の振り返りシートでは、「環境」もしくは「防災」の言葉を用いて、「3つの文章を作ってください」と設定されており、用いられる用語が前年度の「探究」から変更されたのみであった。その後、生徒実行委員会に参加する高校の教師が参加する事前打ち合わせに大学院生も出席する機会をいただき、ポートフォリオについて説明するとともに、高校生サミットの目標を検討した。これを受けて、最終的な問いは「地域の環境を守り、自然災害から人々を守るためにはどうすればいいのか？　あなたは何ができるのか？」となった。振り返りシートでは探究の深まりや社会的スキルについて自己評価させながらも、環境・防災の視点や「行動」することについての認識が、高校生サミット前後の変容として見取りたいものとして位置づけられた。

2019 年度のポートフォリオは、教育方法学研究室で作成したものがほぼ変更なく用いられた。さらに、第1 回生徒実行委員会では、大学院生から高校生に対してポートフォリオの使い方を説明する場を設けていただいた。最終的に配布されたクリアファイルには、振り返りシート（資料 1）、自己評価の参考となるルーブリック、ポートフォリオの使い方が予め綴じられた。

7 月から 10 月までのワークショップや生徒実行委員会は、尼崎小田高校の教員が主体となって活動内容やディスカッションのテーマが決められていた。しかし、11 月の「高校生サミット」のディスカッションのテーマについて、事前に教育方法学研究室から提案を行った。問題意識として、2018 年度の議題（表 1 参照）が漠然としており、地域の人に伝える広報手法の議論が中心となり、高校生サミットを通した認識の深まりがディスカッションの成果として出てこなかったことがあった。この課題を解決することで、ポートフォリオの「学習前・後の基本的な問い」に対しても具体的な回答が得られ、学習前後の認識の変化を生徒自身が捉

えることができると考えられた。そのため次のように議題を小さく分けて議論を進めることで、ある程度ディスカッションの舵取りをする提案した。

1. 共同調査が関係する瀬戸内海の地域の課題とは何か、共同調査の成果が課題解決にどう役立つのか、役立てるにはさらにどのような探究が必要か。
2. 研究者は何ができるか（もしくは研究者に何を明らかにしてほしいか）
3. 大人・地域住民は何ができるか
4. 高校生として何ができるか

これをうけて尼崎小田高校で議題が再検討され、最終的に次の論題が設定された。

1. 「豊かな瀬戸内海」を実現・維持するためは、どのような課題に向き合わなければならないか
2. 瀬戸内地域の課題発見や課題解決に、共同研究や各校の課題研究はどう役立つのか
3. 「①研究者、②大人・地域住民、③高校生」は、何ができるか」

最終的な論題では「豊かな瀬戸内海」というキーワードが新たに追加された。これは、教育方法学研究室の提案に比べて、共同調査に関連する課題以外もディスカッションの俎上にのせる余地を残すものであった。また生徒にとっても、何が課題で何を改善する必要があるのかを議論する前提となる、「豊かな瀬戸内海」像を考察することも可能になった。

最後に、高校生サミットやポートフォリオ評価法の成果を確認するために、「学習前・後の基本的な問い」の回答と、その比較による生徒の自己評価を取り上げる。（資料 2）。A さんは、考えることから行動することに、B さんは、個人の活動から人と人とのつながりへと自身の記述の重点が変化したことを振り返っている。C さんの記述からは、地域ごとの条件を考慮して環境や災害について考える必要性を認識したことが推察できる。同じプログラムを経験しても生徒ごとに認識の変化や着眼点が異なることが明らかになった。

このように、2019 年度の共同研究では、ポートフォリオの振り返りシートの提案やその活用法について大学院生が説明するなど、教育方法学研究室がルーブリックの改善や事後検討を超える役割を果たした。また、高校生サミットのディスカッションの議題についても議論を重ねることで、より明快な論題を設定することができた。2019 年度の高校生サミットでは、教育評価以外の側面についても共同研究が行われていた。

おわりに

2019 年度の共同研究の成果として、OPP シートの構成要素を活かしたポートフォリオ評価法の開発、「学習前・後の基本的な問い」につながるディスカッション議題の構想、生徒の認識の変容の把握が挙げられる。2014 年度から 2019 年度まで 6 年間と長期にわたる共同研究が行われたが、その対象はルーブリックの改善から、高校生の変容を捉え、高校生サミット自体の意味を理解することへと軸足が変化してきた。のみならず、当初の共同研究の目的であった評価方法の研究を超えて、高校生サミット自体の目標や内容の検討にも大学院生が関わるようになった。

このような変化が起きた理由として、2 つの要因を指摘することができる。まず、教育方法学研究室における高校生サミットの捉え方の変化である。ルーブリックは指導改善に役立てるべきものである[16]ため、高校生フォーラムでは指導改善に活かす視点の必要性が課題として提起された。しかし、そもそも学校の授業とは異なるものとして高校生サミットを認識したことで、これまでのルーブリック改訂の成果を生徒の自己評価の参考資料として活かしながらも、ルーブリックから離れて実践に迫ることができた。

次に、目標と内容を問い直す必然性があったことである。海をフィールドとして探究活動を行っている高校生の情報交換の場としてスタートした高校生フォーラムは、参加する生徒が高校で行っている探究活動と結びつくものであった。しかし高校生サミットでは防災の観点が加えられ、環境もしくは防災について探究している生徒にとっては、その一方の観点はこれまで意識していないものであった。そのため、共同研究の対象であった評価方法だけでなく、高校生サミットの目標や内容も検討対象となった。

目標再考の結果、汎用的な社会的スキルの向上に加えて、環境・防災の視点や「行動」することについての認識に着目したことが、評価だけでなく内容の議論を可能にしたと考えられる。汎用的スキルの向上という目標は、内容や活動の肉付けに直接はつながらない。認識に着目したことで、生徒にとって高校生サミット

資料 1. ポートフォリオの振り返りシートと記入例

環境・防災地域実践活動高校生サミット 2019
共同研究 1 年間の記録

[redacted]

[redacted]

資料 2. 高校生サミットのポートフォリオ記述（一部抜粋、誤字等引用者修正）

[redacted]

の目標と結びつくような議題検討を行う可能性が生まれ、内容と目標・評価を一体として検討する共同研究につながったと言えよう。

高校生サミットにおいて、ルーブリックを用いて評価しても指導改善に活かすことが難しいのであれば、いくら教師が生徒を評価しても、それが生徒の学びや経験に資するものにならない。評価方法だけでなく目標や内容と一体として検討するようになったことは、共同研究が生徒の学びや経験に活かされるための重要な転換点であったと考えられる。

【註】

[1] 尼崎小田高等学校『令和元年度環境・防災地域実践活動高校生サミット報告書』2020年3月、p.5。

[2] 本宮裕示郎「『瀬戸内の環境を考える高校生フォーラム』の取り組み：生徒実行委員会の活動に焦点を合わせて」『高等学校における「探究」の指導』2015年、pp.85-98。

[3] 本宮裕示郎「兵庫県立尼崎小田高等学校による生徒実行委員会の意義と課題：教科外活動に関する知見を手がかりに」『思考力・判断力・表現力育成のための長期的ルーブリックの開発』研究成果最終報告書、2016年、pp.99-111。

[4] 若松大輔「ルーブリックを用いた指導と評価の検討：『瀬戸内海の環境を考える高校生フォーラム』の取り組みに着目して」『「資質・能力」を育成するカリキュラムと指導方法の開発』2018年、pp.126-136。

[5] 鎌田祥輝「ポートフォリオ評価法と一枚ポートフォリオ評価」西岡加名恵編著『高等学校教科と探究の新しい学習評価』学事出版、2020年、pp.33-44。

[6] 本宮裕示郎、前掲2、p.86。

[7] 本宮裕示郎、前掲3、pp.104-105。

[8] 同上論文、p.108。

[9] 若松大輔、前掲4、p.130。

[10] 同上論文、pp.133-135。

[11] 兵庫県立尼崎小田高等学校『平成30年度環境・防災地域実践活動高校生サミット報告書』2019年3月、p.6。

[12] 堀哲夫『新訂一枚ポートフォリオ評価』東洋館出版、2019年、p.35。

[13] 用いられた OPP シートは、鎌田祥輝「ポートフォリオ評価法と一枚ポートフォリオ評価」西岡加名恵編著『高等学校教科と探究の新しい学習評価』学事出版、2020年、p.40に掲載されている。

[14] 尼崎小田高等学校、前掲11、p.42。

[15] 配布されたルーブリックは、尼崎小田高等学校、前掲1、p.41参照。

[15] 西岡加名恵『教科と総合学習のカリキュラム設計』図書文化、2016年、p.116。

（博士後期課程）

受理 2021年 3月1日